

はじめに

●あくね問題と私

ついこの前までは、阿久根市と言っても、鹿児島県の人ならばともかく、ほとんどの人にとってはまったくなじみのない町でした。ところが、二〇〇九年あたりから、にわかはこの小さな地方都市が頻繁にマスコミに登場し、またインターネットの世界でも注目を浴びるようになりました。話題の中心は「ブログ市長」とも呼ばれる竹原信一阿久根市長の発言や行動、そしてそれをめぐる波乱や混乱です。

鹿児島県内で政治学の教育研究に従事している大学教員がそれほど多くないということもあり、私は、この阿久根市の問題（以下、「あくね問題」と記します）について、新聞社やテレビ局から頻繁にコメントを求められてきました。これまでも地方自治の問題や選挙に関してコメントを求められた場合、なるべくお断りすることのないよう心がけてきました。しかし、この問題ほど頻繁に長期にわたってコメントを求められたことは、これまでありませんでした。

あれこれとコメントをしながらも、いったいこの問題をどのように考えればよいのだろうか、という疑問が常に頭から離れなくなりました。マスコミが私に求めてくるコメントは、ほとんどが竹原市長の発言や行動の是非に関するものでした。基本的に私は彼の発言と行動には非常に批判的な立場からのコメントを行ってききましたし、今でもその立場に変わりはありません。ただ、コメントをしながらも、はたしてこの問題を、彼の発言と行動の是非という観点からだけ考えてよいものだろうか、という疑問をもつようにもなりました。

阿久根市で起きている出来事を、竹原市長という特異な性格の人物がひき起こした政治的混乱とのみ見てよいものだろうか。もう少し広い視野からこの問題を取り上げる必要があるのではないのだろうか、という疑問です。阿久根市で起きている出来事は、他の地域でも起こりうることであり、日本の政治や社会のあり方とも結びついているのではないのか、というのが私の考えです。マスコミで話題にのぼることの多い橋下大阪府知事や河村名古屋市長の問題にも相通じる部分も少なくないようにも思います。本書のなかで私が、「阿久根問題」と記さずに平仮名で「あくね問題」と記すのも、この問題の一般的・普遍的な性格に着目するからにはかなりません。

●「改革政治」の時代のなかのあくね問題

確かに竹原市長の言動には非常に極端な部分が多々ありますし、前代未聞の事態を数多くひき起こしています。しかし、竹原市長のような言動はどこまで彼独自のものなのでしょうか。昨今の「改革政治」の風潮のなかでしばしばなされる、「改革のためならばルールは無視しても構わない」といったスタイル。「改革」への支持を取りつけるために「敵」を設定し、「敵」を徹底的に攻撃することによって支持を拡大するという政治手法。あれこれと丁寧に説明するのではなく、断定的なワンフレーズを多用する姿勢。こうした政治スタイルは、なにも竹原市長の専売特許ではないように思われます。つまり、今日の日本政治のなかで好まれやすい政治的パーソナリティを極端なかたちで示しているのが竹原市長と言えるのではないのでしょうか。

この点と関連しますが、こうした政治的パーソナリティに対する世論の好意的な視線というの阿久根市に限ったことではないように思います。竹原市長を生み出し支える阿久根市民の意識というのは、実は今の日本に暮らす少なくとも人々が政治に対してもつ意識とある部分で共通しているように思われます。あの小泉フィーバーは私たちの記憶にいまだに鮮明に残っていますが、小泉首相への熱狂的な支持や昨今の地方自治体の「改革派」首長に対する世論の動向とも共通する部分が多分にあるように思えるのです。

あくね問題へのコメントを行いながら私が感じているのは、この問題は、現在の日本の政治や社会が抱え込んでいる困難さと危うさに非常に密接に結びついているのではないのかということ。本書では、阿久根市で起きた出来事を具体的に追いついていながらも、この問題を通して現在の日本の政治や社会が抱え込んでいる困難さや危うさとはいったいどういうものなのかということを考えてみたいと思います。

なお竹原氏は、二〇一〇年十二月六日の市長リコールで失職し、二〇一一年一月十六日に行われた出直し市長選挙でも落選し、現在では市長の職にありません。しかし、二〇〇八年夏からの約二年半の竹原市政を対象とする本書では、基本的に当時の職名を使用することとします。